

征戰先收北平塞。
上海敵壘堅若鐵。
地利不如人心和。
英米譏言不足傷。
東海有國大日本。
君不見旭旗往處壺漿迎。
河北萬里仁風洽。

雁門關占領

天兵百戰不辭艱。
一路長驅如破竹。

時事書感
皇軍遂起捷音頻。
東亞和平是我志。

長驅擊破太原營。
猛攻三月濺熱血。
南京城下盟可必。
亞洲和平誰克當。
允文允武仰天皇。
子來恰似堯舜氓。
滿天瑞雪頌休明。

贊助員 小川堯平

砲擊殷殷欲壞山。
旭旗高閃雁門關。

五年諫山勝保
排擊百艱氣益振。
和衷致力神州民。

送岩佐先生出征

醜虜未知皇軍雄。
修和唯有膺懲劍。
恩師今日上征途。
諸生呼壯送舟航。

五年淺尾敏靖

左提右挈約遂空。
宜斬頑惡掃妖禳。
意氣衝天起懦夫。
歲修偏希武運長。

北支戰線

山岳疊重峻又峻。
請看將士衝天氣。

五年大曲直介

長城牢固聳雲邊。
忽奪敵營旭旆翩。

猛鷲部隊

長驅連翼襲西天。
擊墜投彈三閱月。

猛鷲武威誰比肩。

全支收得制空權。

弔皇軍勇士

戰場日暮轉蕭條。
勿道忠魂不復返。

五年橫正勇吉

勇士空留一墓標。
千秋萬古美名昭。

附錄 本校關係の應召者從軍者芳名錄

現職員

磯尾哲夫先生

岩佐修理先生

舊職員

勢志甚作先生

卒業生

榎本萬吉先生(和歌山縣立耐久中學校在勤)

卒業生 (〇印ハ現役從軍)

第一回生	〇中島靜夫君	山本雅重君	美濃部博君	
第二回生	中島美久君	米村忠雄君	木原正巳君	大村重雄君
第三回生	松本幸雄君	山崎準次君	山本愛治君	鷺尾義治君
	阿江勇君	井出新太郎君	齋藤實君	向山茂夫君
第四回生	奧西丈夫君	吉川武君	宮崎一夫君	山村正夫君
	吉元主稅君(負傷)	森田忠實君	高野義雄君	二杉計治君
第五回生	〇山口泰史君	〇岸口武彦君(負傷)	〇網島久雄君(戰傷死)	岡田一幸君
	水澤清久君	谷口英雄君	元末忠君	〇的場末男君
	古阪敏雄君	江川義弘君	池本茂君	

第六回生	〇林治一君	〇宇野素弘君	足立享君	中村滿君
	新本憲次君	前川文俊君	阿部秀雄君	山口春一君
第七回生	〇石光鐵次君	〇瀨川寬君	〇多田仁三君	星加公雄君
	坂元保太郎君	長谷川義治君	片岡一郎君	並河清二君
第八回生	〇平林良郎君	〇三笠隆三君	〇高原四郎君	神中幸雄君
	〇山下脩史君	高藤勗君	〇吉田功君	來住美寬君
	井上恒喜君(負傷)	前池清一君	〇瀨川欣宣君	〇居山千義君
	馬場信雄君	廣田福太郎君	〇八木田政夫君	奧田惣右衛門君
第九回生	古田廣信君	〇岩野四郎君	原源吾君	金光丈夫君
	古田國雄君	高山洸君	〇山名一夫君	森一夫君
生徒父兄	竹内淳三君			籠谷正直君

學年別 父或ハ兄 父兄名 生徒名

五年 野田秀造殿 野田秀逸

〃 〃 〃 〃 〃 一 〃 〃 〃 〃 〃 二 〃 〃 〃
 年 年

父 兄 父 父 兄 父 兄 兄 兄 兄 兄 父 兄 兄 兄 兄
 岡 竹 馬 福 佐 横 小 山 山 横 小 小 森 中 國 井
 田 本 屋 部 貫 山 阪 口 口 田 西 川 一 野 寶 手
 政 繁 原 知 平 宇 眞 誠 泰 正 文 地 一 平 弘 弘
 吉 殿 忠 殿 八 殿 三 殿 一 殿 史 殿 夫 殿 二 殿 海 殿 殿
 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿

一九三 岡 竹 馬 福 佐 横 小 山 横 小 小 森 中 國 井
 田 本 屋 部 貫 山 阪 口 田 西 川 成 野 寶 喜 手
 嘉 宗 原 秀 眞 活 忠 重 文 三 喜 文 志 夫 滋
 郎 春 一 雄 平 水 男 男 夫 郎 眞 夫 雄 夫 夫

〃 〃 〃 〃 三 〃 〃 〃 四 〃 〃 〃 〃 〃 〃
 年 年

兄 兄 父 兄 兄 兄 父 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄 兄
 根 宗 山 新 鳥 皆 大 松 春 松 古 藤 山 森 大 奥
 津 國 田 谷 越 川 野 尾 名 本 阪 原 田 山 谷 田
 貞 雅 勝 秀 高 良 繁 福 喬 活 敏 豐 肇 淺 武 惣
 義 通 太 吉 男 太 廣 造 雄 太 雄 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿
 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿 殿

一九二 根 宗 山 新 鳥 皆 大 松 春 松 古 藤 山 森 大 奥
 津 國 田 谷 越 川 野 尾 名 本 阪 原 田 山 谷 田
 貞 嘉 勝 武 良 志 繁 德 俊 治 幸 正 敏 信
 男 夫 英 士 一 朗 美 太 介 朗 雄 勇 稔 藏 郎 夫

編輯後記

◆國民精神總動員は、今や第三期に入つて愈々重大性を加へつゝある。此の記念出版はその期間に於ける校友會の事業の一つとして營まれた。主として國漢科が中心となつたが、修身、公民、地理歴史科に負ふ所も少くない。

◆表紙に賀須井會長御揮毫に係る題簽を頂いて飾ることが出来た。

◆編纂締切の後、皇軍は益々各地に神速的な進出を成し着々戦果を收め、今や北支には各種の治安維持自治會が産れ目を追うて明朗化されつゝあり、又上海の海關郵政電信の接收については早くも英米側は恐慌を來してゐるし、一方陥落の危機に瀕した南京に於ては蔣介石自崇蔣共產派の對立は漸次激化の色を示し戦局の進展と相俟つて事態は益々複雑化しようとしてゐる。

◆従つて支那事變に關する纏つた記録としては、事變落着後の集大成に俟つ外はないが、茲にはその進行途上に一線を劃して代表的事項を摘み上げ、生々しい材料を一應並べたことを試みたに過ぎない。

◆由來國民精神の歴史を顧るとき國家意識のより深き自覺には週期があつた様であるが、現在國家は擧げてその自覺に起ち上り、特に歐米列強との摩擦が増大すればするだけ愈々その盟主として東洋平和の確立こそは我が大和民族獨自の使命なりとの自任を深め、皇室を中心として舉國一致、本然の民族精神に生きんとする熱意は澎湃として起るに到つた。久しい間の種々なる経緯の錯綜の後に榮光に輝く週期が到來したわけである。誠に我が國精神文化史上燦然として貴き一期を劃するものといへよう。

◆かくて我々は在來の歐米を先進國なりとし之に追隨する生活態度から脱却して獨自の見地に立ち、東亞諸邦への認識を深め、その安定開發の百年の計の下に各自に課せられたる使命に即し、新しく日本民族的飛躍を試みなければならぬ。そしてそれが、今日に於て要望せられてゐるのであるが、此の編纂もその誘導的因子の一つとなり得てこそ初めて記念出版の眞の意義を有し得るに到るのである。處で國士の府に學ぶ諸君にそれを期待することは果して過當であらうか。切に諸君の心讀と工夫と發明とを希つてやまない。

◆最後に大朝大毎新聞社がその記事の轉載を快諾せられた事に対し深甚の敬意と謝意とを表する。(十二月三日)

昭和十二年十二月十日 印刷
昭和十二年十二月十五日 發行 **【非賣品】**

編輯者 廣 田 廉 夫
發行者 廣 田 廉 夫
印刷者 金 澤 英 夫

神戸市舞合區旭通一丁目七八

發行所 兵庫縣立第三神戸中學校校友會

終

